

# 「生きて働く読みの力」の育成を目指す文学的な文章の指導（第二年次）

## —「読み方」のリフレクションを取り入れた単元づくりを通して—

長期研究員 菅野 智香子

### 《研究の要旨》

本研究は、次期小学校学習指導要領国語科の目標に明示された「日常生活に必要な国語」を具現化する指導の在り方を追究したものである。そのために、単元を通して「読み方」の有用性が実感できるような習得・活用の在り方を工夫した。さらに、児童一人一人がその「読み方」を自覚できるよう、リフレクションを活用した。これらの手だてにより、他作品でも使える汎用的能力「生きて働く読みの力」を育んだ。

## I 研究の趣旨

中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、「学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていく」ことへの課題が挙げられた。そして、次期学習指導要領では、総則において、「他の学習や生活の場面でも活用できる、生きて働く知識となる」ことへの重要性が示された。国語科においても、目標が約20年ぶりに改訂され、「日常生活に必要な国語」という文言が新たに明示された。「分かる」レベルの授業から、「使える」レベルの授業へと質的な転換が求められている。

平成29年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査における「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」という本県児童の回答結果は、57.7%にとどまった。また、実践校における意識調査で、「物語文で学んだことを生活で使っている」とした児童は、48.5%であった。

文学的な文章の指導では、読解に重点が置かれると、ともすると、作品の内容理解だけで学習が完結してしまう。そのため、単元を通して何が身に付き、どのように活用できるかに着目した指導が必要になる。

以上のことから、文学的な文章の指導において、「読み方（＝身に付けさせたい力）」に着目しながら作品を読み味わう授業を構想するとともに、その「読み方」を他作品の解釈に活用できる汎用的能力として身に付けるためにどのような単元を展開すればよいのかを明らかにしたいと考えた。そこで、この汎用的能力を「生きて働く読みの力」と定義し、研究を進めることとした。

## II 研究の概要

### 1 研究仮説

「読むこと」領域の文学的な文章の指導において、以下

の視点に基づいた手だてを講じれば、「生きて働く読みの力」を育成することができるであろう。

【視点1】「読み方」の有用性を実感させる習得・活用のある単元構想

【視点2】「読み方」の自覚を促すリフレクションの工夫



図1 単元構想

## 2 研究内容

(1) 【視点1】「読み方」の有用性を実感させる習得・活用のある単元構想

単元で身に付けさせる「読み方」を明確にし、単元を貫いて繰り返し使わせる。習得した「読み方」を意識的に活用させ、また、「読み方」を定着させるというサイクルの中で、学んだ「読み方」の有用性を実感できるようにする（図2）。

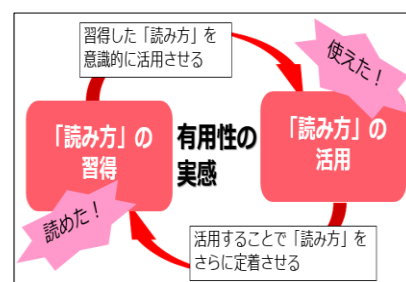


図2 「実感」のモデル図

(2) 【視点2】「読み方」の自覚を促すリフレクションの工夫

本研究におけるリフレクションとは、「学んだことを客観的に見つめ直し、次につながる活動」のこととす



図3 「自覚」のモデル図

る。無意識のうちに用いていた「読み方」を言語化し、可視化することで、学んだ「読み方」のよさを自覚させていく。そのために、「毎時間のリフレクション（国語日記）」「習得と活用をつなぐリフレクション（読み方トラの巻）」「単元終末のリフレクション（自分物語）」を取り入れる（図3）。

### 3 研究の実際

対象学年 第6学年（2クラス）  
 授業実践Ⅰ 単元名 人物と人物の関係を考えよう  
 授業実践Ⅱ 単元名 人物の生き方を考えながら読もう

本稿では、授業実践Ⅱ「人物の生き方を考えながら読もう」（主教材『海のいのち』）の実際について述べることにする。本実践では、「描写をもとに人物の心情を読む」という「読み方」を育てることをねらいとした。

#### (1) 【視点1】について

##### ① 第一次「読み方」の見通し

（活用教材：『ヤクーバとライオン』ティエリ・デュー）

主教材『海のいのち』は、一人の少年の成長の過程で、人生を左右する葛藤と決断の場面をどう読ませるかがポイントである。しかし、そのような経験をしたことがある児童は多くはない。そこで、第一次では、『ヤクーバとライオン』を活用し、読みの土台となる生活経験のない児童に仮の知識をつくり、読みの構えをもたせて主教材へとつなぐ。児童は、二つの作品の共通点を考えることで、人物の心情の変化を読むためには、人物の描写を読むとよいという読みの着眼点を知った。

##### ② 第二次「読み方」の習得

（活用教材：主教材『海のいのち』立松和平）

中心人物・太一の心情の変化には、対人物・瀬の主の存在が関係していることをつかませるために、「瀬の主」の描写の表現を読んでいった。多くの表現の中で、特に児童が着目したのは、瀬の主の「目」の描写である。最初は瀬の主を「光る緑色の目」をした不気味な魚だと思っていたが、実際は「青い宝石のような目」の美しさ、「黒い真珠の瞳」の崇高さをもって存在していることに気付く。児童は、太一の心情の変化を、瀬の主の圧倒的な存在感と関わらせて解釈していた。

このように、描写の表現を読んでいくと、直接書かれていない人物の心情や様子が分かることに気付き、学級全体で「描写読みのワザ」と名付け、共有した。

##### ③ 第三次「読み方」の活用

（活用教材：『天とくつついた島』立松和平）

この作品は、『海のいのち』との共通点が多く、豊かな

描写の表現が数多く描かれている。つまり、作品の内容だけでなく、学んだ「読み方」を使って読むことができる作品である。

児童は、夢中になって作品を読み、『海のいのち』で学んだ「描写読みのワザ」を使って解釈する児童が多かった。以下は児童の書いた『天とくつついた島』の紹介文の一例である。この児童は、二つの描写の表現に着目し、それぞれの言葉から想像を広げ、それらをつないで作品のテーマを考えていた（図4）。

私は『天とくつついた島』を描写読みのワザを使って読みました。私は特に二つの描写に注目しました。一つ目は「海は絶えずほえています」です。島へ技師が来て、サンゴしょうやさとうきび畑をこわさせないために、海はほえ続けたのだと思います。海がほえるほどのいかりだったのでしょうか。もう一つは「この世のものは思えないけがれのない海でした」です。このサンゴしょうは、海の心みたいで、すべての命である海の清らかな心がこの文で表されています。

この二つの描写は、自然の二つの顔を表していて、おばあさんの願いがこめられています。この本は、この美しい描写から自然について考えさせる本です。

図4 児童の紹介文

個で紹介文を書いた後、さらに解釈を広げさせるため、友達と自分の読みを交流する場を設けた。友達との共通点や相違点を考えたり、新たな解釈を生みだしたりするための活動である。児童は、模造紙に互いの考えを書きながら、自分の考えを広げ深めていった（図5）。

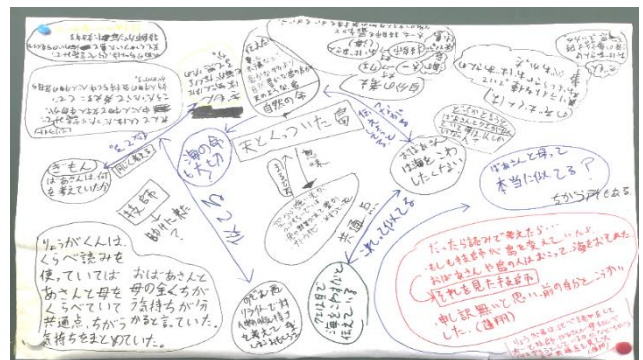


図5 模造紙を使った友達との交流

#### (2) 【視点2】について

##### ① 毎時間のリフレクション「国語日記」

毎時間のリフレクション「国語日記」では、振り返る観点を児童と一緒に作り、学習感想や内容だけでなく、学習方法や考えの変容、他との

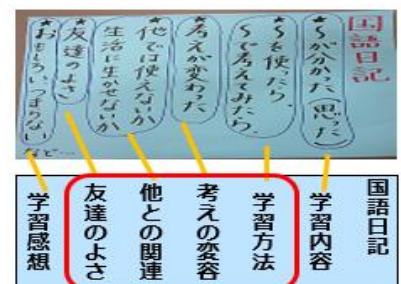


図6 国語日記の観点

関連、友達のよさなど、その観点を選んで書かせた（図6）。

## ② 習得と活用をつなぐリフレクション「読み方トラの巻」

これは、『海のいのち』でどんな「読み方」を学び、次の『天とくつついた島』でどんな「読み方」を使えるかを見通すための場である。例えば、『描写読みワザ』を使うと、直接書かれていない気持ちも想像できる」「比べ読みをすると、読みの着眼点が増える」など、個の学びに意味付け・価値付けを行い、学級全体で共有し、一般化を図った（図7）。

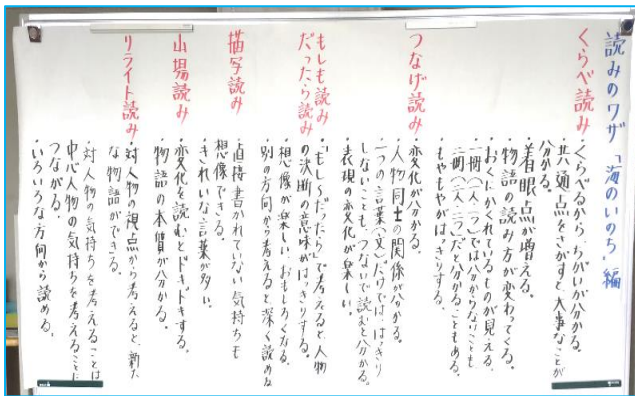


図7 『海のいのち』読み方トラの巻

## ③ 単元終末のリフレクション「自分物語」

単元を通した自分の学びを振り返り、この単元で何を学んだのかを自覚させるために設定した。児童の「自分物語」には、「解釈が変わった」という作品の内容についてだけでなく、「この『読み方』を使うことで解釈が深まった」など、メタ認知を働かせて「読み方」の有用性を自覚した気付きが見られた。

## III 研究のまとめ

### 1 仮説検証

#### (1) 【視点1】について

教科書教材で学んだ「読み方」を他の作品でも使っていたのかについて、活用段階で用いた『天とくつついた島』の紹介文を分析した。結果を見ると、「学んだ読み方を使っている」「根拠を挙げている」「解釈が妥当である」児童の割合は、全体の約8割を超えていた。【視点1】に基づいた習得・活用のある単元構想により、「読み方」を使い、描写等の根拠を基に考えようとする意識が高まっているといえる（図8）。

「天とくつついた島」の紹介文		
「読み方」を使っている	41/43人	95%
根拠となる叙述を挙げている	43/43人	100%
根拠に対する解釈が妥当である	34/43人	79%
自分の考えが記述してある	29/43人	67%

図8 他作品への活用

#### (2) 【視点2】について

「国語日記」の記述の数と実践後の事後テストの正答率との相関関係をピアソンの積率相関係数<sup>\*1</sup>で検証した（図9）。その結果、以下の点が明らかになった。

※1 二つの確率変数の間の相関を示す係数

- ・国語日記に学習内容をたくさん書いているからといって、テストの正答率が高いわけではない。
- ・「学習方法」や「他作品との関連」について書いてある児童のテストの正答率は高く、書いていない児童の正答率は低い。

分類の観点	事後テストとの相関	
学習方法	0.47	かなり相関がある
他作品との関連	0.41	
協働性	0.33	やや相関がある
学習内容	0.18	ほとんど相関がない

相関係数(r)	目安の解釈
$ r  \leq 0.2$	ほとんど相関がない
$0.2 \leq  r  \leq 0.4$	やや相関がある
$0.4 \leq  r  \leq 0.7$	かなり相関がある
$0.7 \leq  r $	強い相関がある

図9 国語日記の記述と事後テストの正答率との相関

これらの結果から、リフレクションにおいて、「学習方法」や「他作品との関連」を自覚させることの重要性が明らかになった。

## 2 成果と課題

### (1) 研究の成果

- ① 単元で学ぶ「読み方」を明確化するとともに、主教材で学んだ「読み方」を副教材や並行読書の本で活用する単元を構想した。この意図的な設定により、主教材の内容把握にとどまらず、「読み方」が他作品の解釈に生かされ、児童に「読めた」「使えた」と実感させることができた。
- ② 三つのリフレクションにより、メタ認知の機会を設定した。特に、習得と活用をつなぐリフレクションでは、それまで無意識に使っていた「読み方」を意識させるとともに、学級全体でそのよさを確認することができた。児童からは「この『読み方』を使ったから深く読むことができた」という声が数多く聞かれた。
- ③ 今回の二つの視点に基づいた単元づくりを通して、教材ベースの授業から、児童にどのような力を身に付けさせたいかという資質・能力を育む授業づくりの一例を示すことができた。それによって「読み方」を意識的に使う児童の姿が見られた。

### (2) 研究の課題

- ① 活用場面では、授業者による独自の評価規準を用いたが、その客観性をさらに高めていく必要がある。
- ② 習得と活用をつなぐリフレクションでは、「読みワザ」として「読み方」をまとめたが、文学的文章特有の技能と思考のための技能が混在していた。今後、児童にも分かりやすい分類となるよう、さらに整理していきたい。